八戸におけるアートのまちづくり 10 年の蓄積―拠点としてのはっちと新美術館

河村 信治　八戸工業高等専門学校

1. はじめに

東北支部では 11 月 13 日（土）午後，青森県八戸市において「新美術館と中心市街地活性化十余年の軌跡」をテーマとするまち歩き見学会を実施した。まず同 3 日に完全リニューアルオープンしたばかりの市美術館を訪ね，佐藤慎也館長に美術館のコンセプトと設計についての話を伺い，開館記念の企画展を見学した。その後は都市再生推進法人(株)まちづくり八戸の柳沢拓哉氏のガイドにより，まちなかを回遊しながら中心市街地活性化の主な事業の足跡を辿って歩いた。本稿では，美術館とともに八戸の文化芸術推進を支える複数の拠点と市民活動について紹介したい。

2. 新たな八戸市美術館「アートファーム」

八戸市美術館（https://hachinohe-art-museum.jp/）は市中心街の市庁舎前にある。手狭で老朽化が進んだ旧美術館を 2017 年に閉館し，敷地を拡げ周辺環境も整備して全面建て替えされたものである。新美術館整備事業は 2016 年にスタートし，市民意見交換会などを重ねながら新たな時代の美術館像を展望し，「アートファーム」をコンセプトとして「もの」「こと」を含む文化創造と学びの場として構想された。エントランスを入ると広がる「ジャイアントルーム」では制作活動はじめ多様な人々のさまざまな活動と交流が促される。またコレクションは，地域の文化芸術資源や当該地域を題材とする作品をクローズアップするという。

オープニング企画展についても，テーマとして地元の「八戸三社大祭」を題材としているため，導入では一見博物館展示のようにも見えた。しかし解説を聞きながら進んでいくと，八戸に当たり前のようにあるもの（祭を支えるコミュニティなど），あるいは地方の今日的な課題（商業施設の衰退，コロナ禍での過剰な自粛ムードなど）を気鋭のアーティストたち（彼らもこれまで制作活動を通して八戸と関係を持ってきた）がそれぞれコンセプチュアルな作品に仕上げていることがわかり，テーマと地域の再発見の手法として興味深かった。後述する市内の施設や，弘前れんが倉庫美術館など性格の異なる県内の美術館等と連携した相乗的な活用が期待される。

3. 八戸中心市街の文化芸術拠点

八戸市中心市街地活性化基本計画（第 1 期）が 2008 年に認定，その目玉事業の一つである「八戸ポータルミュージアム（はっち）」が 2011 年 2 月に開館した。はっちにはアーティスト・イン・レジデンスの機能があり，開館前後から八戸市ではアーティストを招いて地域を題材や舞台とした，あるいは市民を巻き込んだ制作活動を本格的に推進してきた。それから 10 年，市営の「八戸ブックセンター」（2016 年開館，「Library of the Year 2021」特別賞受賞），屋内型まちなか広場「マチニワ」（2018 年開設）と，ユニークな施設の設置が続き，此度の美術館で一連の文化施設が一通り出揃ったところである。

さらにこれらの施設を拠点とする市民活動もさまざまに展開，定着してきた。モデルケースとして市の事業である市民集団「まちぐみ」（http://machigumi.main.jp/）を紹介する。

「まちぐみ」は，もともとはっちオープニング事業の招待アーティストであった山本耕一郎氏が，その後八戸に移住し，人と関わりまちを面白くするプロジェクト型アート活動を続ける中で，市と連携し 2014 年にスタートさせた企画である。「組長」山本氏の下，誰でも簡単に「組員」登録（2021/11/28 現在 537 名）でき，活発なメンバー中心に“なんか楽しそう”なプロジェクトをさまざま仕掛け続けている。今秋「令和 3 年度あしたのまち・くらしづくり活動賞」総務大臣賞を受賞した。今回のまち歩き見学会の最後に，はっち館内で山本氏から直接話を伺うことができた。

4. おわりに―文化芸術推進のまちづくりに向けて

若者の流出に歯止めが効かない地方都市でアーティストの持つ創造力，実践力，発信力は大きな価値を持つ。“なんか魅力がある”ところに人が集まり，循環が生まれる。この 10 年あまり，八戸に関わったアーティストたちと市民との交流による創造的エネルギーの蓄積をしっかりふりかえり，美術館含めて充実したインフラをフル活用してまち育ての推進力にしていかなければ，もったいない！

写真　佐藤館長の解説で美術館展示の見学